野洲支部　第１回懇話会「新たな出会いの中で」の報告

５月の「親鴨だより」で紹介されました懇話会の第１回が６月１４日、野洲事業所内のゲストサービスルームで行われました。当日は、後藤総務・厚生サービス担当のご配慮で、子鴨の出席も呼びかけてくださり、約２０名の子鴨の方々もご参加くださいました。ありがとうございました。以下は、お話の概要です。

平野正さんー“牧師になって３年”

平野さんは、７年前にＩＢＭを早期定年退社後、同志社大学神学部で牧師になる準備をして３年前に日本キリスト教団の牧師になり、現在は滋賀県安土町の安土教会に仕えています。牧師になって出会った人々との新たな経験を通して、宗教や信仰についての考えを話されました。また、ボランティア活動として、視力に障害のある約７００人の方々に、あるパソコン誌の主な記事をフロッピーに編集して送り出す作業をしています。「福音」とは「神からのよき知らせ」という意味ですが、視力に障害のある方々にとって、パソコンこそ「福音」だそうです。音声合成装置は、ディスプレイに代わって、文書の作成や聞き取りを可能にし、目の見える人との文書によるコミュニケーションができるから、とのことです。

宗教は現在を生きるためのものであり、弱い存在としての人間も、障害のある人も、神から授かった命や個性を、お互いに大切にしてゆく社会を作ることに役立つのではないかとまとめていました。

小熊俊夫さんー“小さな町の国際交流”と私

小熊さんは、野洲町国際交流協会の設立に尽力され、’９３年に定年退職後、野洲町国際交流協会の専務理事としてご活躍を続けられております。小熊さんは本年４月に、「市民国際交流賞」を受賞されました。本賞は、京都新聞社が毎年、文化・芸術・教育・スポーツの各分野で国際交流に尽くされた人に贈られる賞で、本年度の滋賀県からの受賞は、小熊さんお１人でした。お話しの内容を要約は次の通りでした。

(1) 現代は、国際化の時代といわれる。

国際化は、親善　→　協力　→　共生の時代と変わってきている。

(2) 近年、国際化は急速に拡がりを見せ、国際交流の重要性は益々その度合いを深めつつある。

(3) 近年、私たちの身近な地域社会にも多国籍の人々が暮らすようになって、「内なる国際化」が始まっている。もはや私たちは私たちの身近なところに住む他国の人々と協力をしながら、明日の地域を考えざるを得ない状況にある。

(4) 異文化を学び、私たちのライフスタイルを見直すことが求められている。

(5) 次の世代を担う若い人たちと、国際交流の輪を広げることが必要であり、広げたい。

(6) 野洲町国際交流活動の紹介

’９３年６月に滋賀県下で１８番目の協会として野洲町交際交流協会が設立され、町民による国際化の推進母体として約６年が経過した。この間、国際化に対応した魅力ある「まちづくり、人づくり」をめざし、さまざまな交流活動を推進している。友好姉妹都市との派遣、受け入れ事業（ホームステイ・プログラム）を始とする交流事業・町民への国際理解の啓発・普及事業（国際理解講座）・地域交流事業（カルチャー教室、世界料理教室、国際交流パーティー）、外国人に対する支援活動（日本語教室開催、生活ガイドブック発行、タウン・マップ発行・生活相談窓口）、情報誌の発行（隔月）など幅広い交流事業の紹介。

最後に、この６年間で「蓄積された共感」を大切に、「響き合う心」と「分かち合の気持ち」を育みながらち」を育みながら、感性豊かな協会の組織づくりにボランティアの力を結集して、野洲町の国際化に寄与してまいりたいと、抱負を語られ結ばれました。

今回は偶然お二人とも、きょうかい（教会と協会）のお話でした。それぞれの内容は違っても、「人との出会い」という点では共通するものがありました。

次回の予定が決まり次第、追ってご案内いたしますので皆様のご参加を期待しております。

（親鴨会野洲支部事務局）